

全国の園長先生に  
無料でお届けしています

子どものよりよい育ちをともに考える

 Benesse

# これからの 幼児教育

2023 Spring

春

## 対談

数字をもとに語り合う  
幼児教育界の「今」と「これから」  
保育システム研究所 代表取締役 吉田正幸  
神戸大学大学院教授 北野幸子

## 調査紹介

早稲田大学・ベネッセ教育総合研究所共同研究  
子どもの生活リズムと  
健康・学習習慣に関する調査  
広島大学大学院准教授 田原 優  
愛国学園短期大学准教授 古谷彰子

## 特集

子どもを真ん中にして  
数字をもとに考える  
幼児教育

PDF版では表紙写真を公開しておりません。ご了承ください。

## 研究紹介

子どもの具体的な姿を通して  
「非認知(社会情動的)能力」の可視化を試みる  
一般社団法人 大阪府私立幼稚園連盟教育研究所

## 特別企画

数字では見えない「育ち」を支える保育実践  
沖縄女子短期大学助教 羽地知香

PDF版では表紙写真を公開していません。ご了承ください。

今号の写真 [表紙 / 裏表紙 / 上]

©沖縄県那覇市首里「木漏れ日喫茶」イベントにて

本誌をお手に取っていただき、ありがとうございます。

4月にこども家庭庁が発足する2023年は、幼児教育界にとって節目のときとなります。そこで、今号ではさまざまなデータに着目し、そこに表れる「数字」をもとに幼児教育界の「今」と「これから」について、識者に語っていただきました。

後半では、「数字」からは少し離れて、可視化が難しい非認知（社会情動的）能力の育成に関する研究や、沖縄県で展開されている園とは異なる形での个性的な取り組みをご紹介します。沖縄県では3年ぶりとなる対面での取材を行い、表紙もイラストから写真へと変わりました。子どもたちとの触れ合いを通して、改めて、幼児教育のすばらしさや、子どもの育ちの基礎を担う責任の大きさをかみしめています。

ぜひ、多くの先生方にお読みいただき、今後の園のあり方を考える際にお役立ていただけたら幸いです。

## 「これからの幼児教育」編集部

### STAFF

編集発行人 / 西村俊彦 発行所 / (株) ベネッセコーポレーション  
印刷製本 / 凸版印刷 (株) 監修 / 北野幸子 (神戸大学大学院教授)  
企画・制作 / 仙田由紀子 (ベネッセ教育総合研究所)  
編集協力 / (有) ベンダコ、丹羽三千代、菊池健 (mananico)、神田有希子  
執筆協力 / 二宮良太  
表紙 + 特集扉デザイン・イラスト協力 / へんな優 撮影協力 / 菊池健 (mananico)

## CONTENTS

### 1 特集

## 子どもを真ん中にして 数字をもとに考える幼児教育

### 2 対談

## 数字をもとに語り合う幼児教育界の「今」と「これから」

保育システム研究所 代表取締役 吉田正幸

神戸大学大学院教授 北野幸子

### 8 調査紹介

## 子どもの生活リズムと健康・学習習慣に関する調査2022

## 平日・休日の生活リズムのズレを生む

## 「社会的時差ボケ」。保護者とともに改善を

広島大学大学院准教授 田原 優

愛国学園短期大学准教授 古谷彰子

### 12 研究紹介

## 子どもの具体的な姿を通して

## 「非認知（社会情動的）能力」を可視化し

## 保育の質の向上につなげる

一般社団法人 大阪府私立幼稚園連盟教育研究所

### 16 特別企画

## 数字では見えない「育ち」を支える保育実践

沖縄女子短期大学助教 羽地知香

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。

また、敬称略とさせていただきます。

※本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。

©Benesse Corporation 2023



# 子どもを真ん中にして 数字をもとに考える 幼児教育

年に2回発行する本誌では、これまでベネッセ教育総合研究所による調査をもとに、「数字」という側面から、子どもの育ちや生活、園の状況などに関する研究成果を、解説や提言などのさまざまな形でご紹介してきました。

今号ではそれらに加え、幼児教育界全体に視野を広げて、少子化という課題や園種別の規模の変化、園を支える先生方の職場環境などを、「数字」に着目して取り上げています。こども家庭庁の発足により新しい展開も感じられる中で、各園の力が結集され、幼児教育界の「これから」が形づくられていくよう、ともに考えていきます。



# 数字をもとに語り合う 幼児教育界の「今」と「これから」

少子化や保育ニーズの多様化が進む中、2023年4月にはこども家庭庁が設置されるなど、幼児教育を取り巻く状況は大きく変化を続けています。グラフやデータなどが示す数字は客観的な指標となるため、変化する幼児教育界を捉えて今後の課題を明確にする一助となります。保育システム研究所代表取締役の吉田正幸さんと神戸大学大学院教授の北野幸子先生が、そうした数字をもとに幼児教育界の「今」と「これから」を語ります。



保育システム研究所  
代表取締役

吉田正幸さん (よしだ・まさゆき)

文部科学省「新しい幼児教育の在り方に関する調査研究」企画評価会議委員、厚生労働省「社会保障審議会少子化対策特別部会」委員、内閣府「子ども・子育て支援制度における継続的な見える化に関する有識者会議」副座長などを歴任。編著書に「次世代の保育のかたち」(フレーベル館) など。



神戸大学大学院  
人間発達環境学研究科 教授

北野幸子先生 (きたの・さちこ)

福岡教育大学教育学部准教授、神戸大学人間発達環境学研究科准教授などを経て、現職。本誌の監修を務める。専門は、乳幼児教育学、保育学。著書に『地域発・実践現場から考えるこれからの保育一質の維持・向上を目指して』(わかば社) など。

出生数・出生率 出生率は近年、横ばいも、出生数は下げ止まらず

▶▶▶ 図 1

## 少子化が続く状況をメリットに変える発想の転換を

——近年、少子化に拍車がかかっていますが、この状況をどう受け止めていますか。

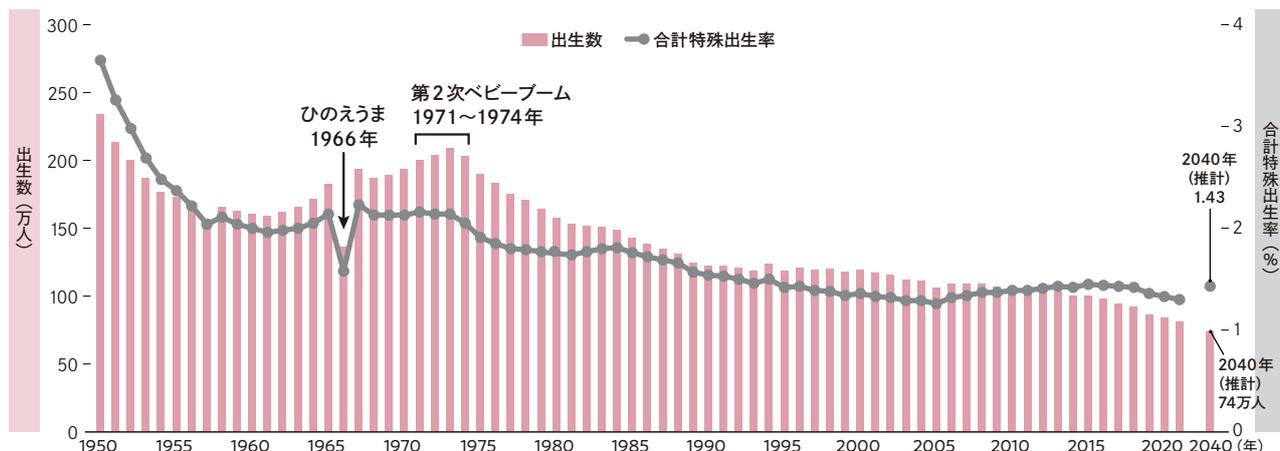
 日本の少子化の本質的な要因は、非婚化・晩婚化にあるというのが、私の見方です。背景には、若年層に非正規雇用が増え、将来の安定した生活が保障されないといった働き方や労働環境などの問題があります。さらには、一夫婦あたりの子どもの数も少なくなりました。これらの解決には本来、労働政策の抜本的な見直しと子育て支援という両面での対策が必要だと考えますが、これまでの少子化対策は待機児童対策など、子育て支援の方に目が集まり、結果として出生数や出生率の改善は見られませんでした。むしろ、働き方の見直しをせずに「長時間労働をするなら延長保育が必要だ」等、働き方

のひずみを保育でカバーしようとする仕事と子育ての両立支援が進められてきたように感じています。

仮に今後の対策により多少出生率が上がっても、母体となる子どもを産み育てる世代の人数が減り続けるため、出生数の増加は期待できません。少子化という大きなデメリットに見える状況をいかにメリットに変えるかという、発想の転換が求められていると思います。

 少子化により園児が少なくなるといった危機感を抱く園もあると思いますが、北欧には保育者と子どもの割合が1：8や1：6といった国もあります。少子化を背景として、保育者1人あたりの園児数を減らし、子ども一人ひとりに対する保育の質を高めていく、という考え方に移行しやすくな

## 図1 出生数・合計特殊出生率の推移



※ 2021年までの出生数・合計特殊出生率：厚生労働省「令和3年(2021)人口動態統計(確定数)の概況」の「第2表-1人口動態総覧の年次推移」「第2表-2人口動態総覧(率)の年次推移」より。 ※ 2040年の出生数：国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成29年推計)」における出生中位・死亡中位仮定による推計値。 ※ 2040年の推定合計特殊出生率：国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成29年推計)」より。

るとも考えられます。こうした制度設計は政策に左右されますが、園としていかに保育環境を改善させるかといった主体的な姿勢も大切にしていきたいと思います。

吉田さん 加えて環境という面では、園内だけでなく、家庭や地域社会という子どもを取り巻く環境

も非常に重要です。近年は地域社会とのつながりが薄れ、家庭の子育てが孤立化する状況になっています。保育の質の向上を、地域社会とも連携しながら家庭・地域社会における機能の回復とともに考え、いかに支援していくかということが、これからの課題になると考えます。

## 園児数

1998年以降、幼稚園と保育所の園児数が逆転

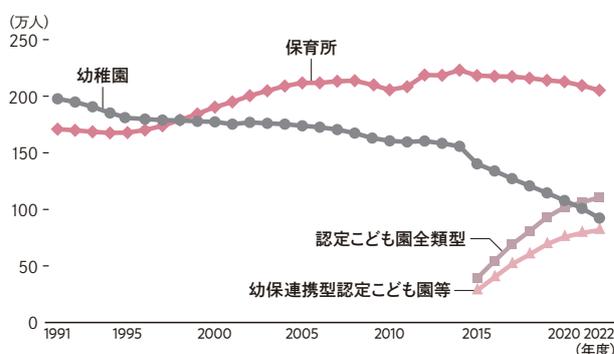
図2

## 園種を超えた一元化の中、利用する側のニーズに応える支援を

——園児数の内訳を見ると、保育所や認定こども園の園児数が増加する一方で、幼稚園の園児数は減少する傾向が見られます。

吉田さん 背景には女性就業率の上昇と、それに伴う共働き世帯の増加があります。保育所や認定こども園へのニーズが増し、通う園児も増えていますが、重要なのは、だからといって幼児教育機能が失われたわけではないということです。認定こども園は保育機能とともに幼児教育機能を併せもち、保育所も2006年の教育基本法の改正以来、幼稚園と同等の幼児教育機能をもつようになってきました。園種別の園児数の増減だけでなく、それらが有する機能に目を向けると、園種を超えた幼児教育の一元化が進

## 図2 幼稚園・保育所・認定こども園 在園者数の推移



※幼稚園：令和4年度「学校基本調査」より。  
 ※保育所：「社会福祉施設等調査」・「保育所等関連状況取りまとめ」(令和4年4月1日)より。  
 ※認定こども園(全類型)・幼保連携型認定こども園等：「子ども・子育て会議」会議資料(平成27年～令和4年)より。

んでいると考えることができます。だからこそ、子どもやその保護者という利用する側のニーズに焦点をあて、それに応える支援のあり方を考えていくことが、今後いっそう重要になると考えています。

**北野先生** 待機児童対策の研究で、各園の所在地をマッピングして0～5歳人口と併せて考えたところ、ごく近くに位置するにもかかわらず、保育所は定員いっぱい、幼稚園は定員割れといった状況が多く見られました。同じ地域にあっても、広い園庭で

少人数で伸び伸びと遊べる園もあれば、そうではない園もあるわけです。子どもの意思にかかわらず、保護者の就労形態によって通う園が決まってしまうのは、不条理といわざるをえません。SDGsの目標4に「質の高い教育をみんなに」とありますが、園種を超えて、乳幼児の教育の一元化が進むことで、すべての子どもがよりよい環境で質の高い教育を受けられるように、制度面を含めて改革していくべきだと感じます。

**未就園児率**      **0歳児は8割超、1～2歳児は約5割が未就園**      **3**

**未就園児家庭への支援を充実させ、子どもの体験や育ちを豊かに**

——近年、園に通わない未就園児に関する課題も注目されていますが、どうお考えでしょうか。

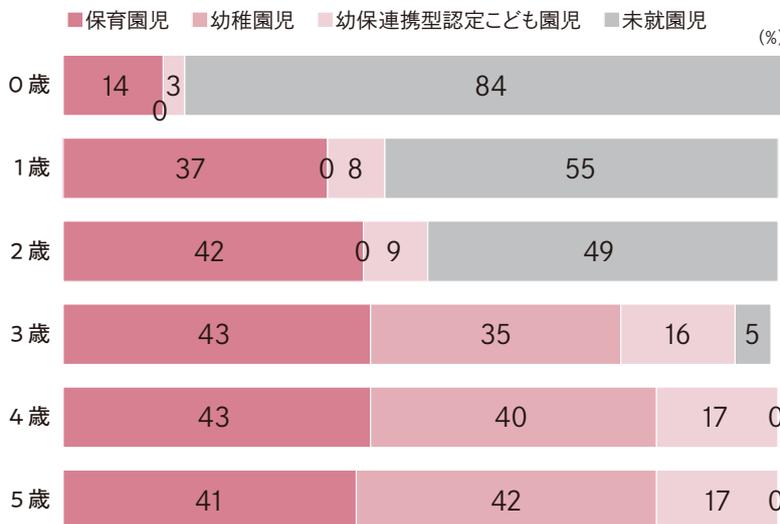
**吉田さん** 未就園児の大半は、専業主婦・主夫のいる家庭の子どもになります。こうした家庭では保育所を利用できないことが多く、3歳未満では幼稚園にも入れないため、必然的に未就園の状態になります。共働き世帯の増加などに伴い、未就園児の数は減少していますが、こうした未就園児家庭に十分な支援が行き届いていないという問題が、特に近年は顕在化しています。

現代の日本では地縁や血縁の機能が低下し、家庭

が孤立しています。昔は未就園児であっても地域の子ども集団の中で過ごしたり、保護者は親族や地域コミュニティからサポートを受けたりできましたが、今は保護者と子どもが2人きりという状況が増えて、困難を抱えやすくなっています。ここに園の支援の余地があるでしょう。

制度面でも、2015年にスタートした子ども・子育て支援新制度において、発足当時の政治課題だった待機児童問題が収束に向かっていることから、すべての子どもや子育て家庭への支援が可能になりつつあります。こども家庭庁の設置も追い風となって、

**図 3 年齢別未就園児率**



※保育園の数値は令和元年の「待機児童数調査」(平成31年4月1日現在)より。なお、「保育園」には地方裁量型認定こども園、保育所型認定こども園、特定地域型保育事業も含む。4歳と5歳の数値については、「待機児童数調査」の4歳以上の数値を「社会福祉施設等調査」(平成30年10月1日現在)の年齢別の園種別の利用者数比により按分したもの。  
 ※「幼稚園」には特別支援学校幼稚部、幼稚園型認定こども園も含む。数値は令和元年度「学校基本調査」(確定値、令和元年5月1日現在)より。  
 ※幼保連携型認定こども園の数値は令和元年度「認定こども園に関する状況調査」(平成31年4月1日現在)より。  
 ※「未就園児」は該当年齢人口から幼稚園児数、保育園児数、幼保連携型認定こども園児数を差し引いて推計したもの。企業主導型保育事業や認可外保育施設を利用する児童を含む。  
 ※四捨五入の関係により、合計が合わない場合がある。

今後、未就園児のいる家庭への支援は、充実していくことが期待できます。

 未就園児家庭への支援は、単に就園率を上げればよいという話ではなく、労働政策とは異なる文脈で検討すべき課題だと思います。ヨーロッパでは社会経済的な支援が必要な家庭を中心に、3歳未満児の就園率を調査して支援につなげる動きが高まっています。社会経済的に厳しい状況の家庭で

は、早期に就園することで貧困や虐待の連鎖から抜け出しやすくなることがわかってきたからです。

未就園児に対する支援は、子どもが豊かな体験をする権利の保障にもつながります。園には遊具や絵本、玩具といった地域の資源が豊富にありますし、屋外で安全に遊べる環境も整っています。未就園児が、こうした環境をいつでも利用できるような支援が重要だと考えています。

## こども家庭庁

予算と人員を充て、多様な支援をめざす



# すべての子どもや子育て家庭への大幅な支援の拡充に期待

——こども家庭庁の設置により、園を取り巻く環境は大きく変わりそうです。

 こども家庭庁の設置は画期的なできごとです。充てられる人員や予算の規模などを考えても、子どもや子育て家庭への支援が大幅に拡充するのは間違いありません。

現在、子ども政策のDX\*推進や子どもの居場所づくり、未就園児支援、政策決定過程における子どもの意見反映プロセスといった多くのテーマに関する議論が進められています。設立後は、母子保健や虐待、障がい、いじめ、一人親家庭などを含めた多様な支援が充実していくでしょう。

あるいは園関係者から見ると、園に関する整備体制がそれほど手厚くないという印象を受けるかもしれません。これはこども家庭庁が、子どもが育つ場所を広く捉えて、家庭や地域社会を含めた幅広い支援を行おうとしているからです。その中でも園は、支援の重要な担い手として位置づけられています。こども家庭庁の設置は、園の関係者が視野を広げ、家庭や地域社会とどのように連携・支援するかという発想の転換を図っていく、よいチャンスになると感じています。

 こども家庭庁の役割にはとても期待していますし、今後、人員や予算がますます増えていくことを望みます。

こども家庭庁による政策のもと、園が自治体や専

## 4 こども家庭庁発足時点での 予算と人員の規模

予算 **4.8兆円**

2023年度のこども家庭庁当初予算案（一般会計・特別会計）。2022年度第2次補正予算で前倒して実施するもの等を含めれば、5.2兆円。

人員 **430人体制**

厚生労働省や内閣府から事務移管する約200人に、民間団体や自治体の人材などを含めた増員により、430人体制となる見込み。

※予算は、内閣官房「令和5年度当初予算案のポイント（こども家庭庁）」より。  
人員は、内閣官房「こども家庭庁組織体制の概要」より。

門機関など外部との連携を進める上では、それぞれの果たすべき機能をしっかりと見極めて、各々の専門性を保つことが重要になると思います。その意味では、保育の専門職化は大事な観点で、保育者の重要性や独自性を社会に発信していくことも、ますます重要になります。そうすることで、医療や福祉を始めとした保育と隣接する分野の専門家との連携でも、効果が高まっていくでしょう。

\* デジタル・トランスフォーメーション。デジタル化により、人々の生活をあらゆる面でよりよい方向に変化させること。

## 保育者の処遇の改善は子どもの権利の保障につながる

——保育者の処遇についてお考えをお聞かせください。諸外国に比べ、就労時間が長く、仕事に対する満足度は低いという調査結果があります。

**吉田さん** 就労時間が長いのは、利用者である保護者が長時間労働をしているからです。保育標準時間を11時間とする国は、恐らく日本だけだと思います。

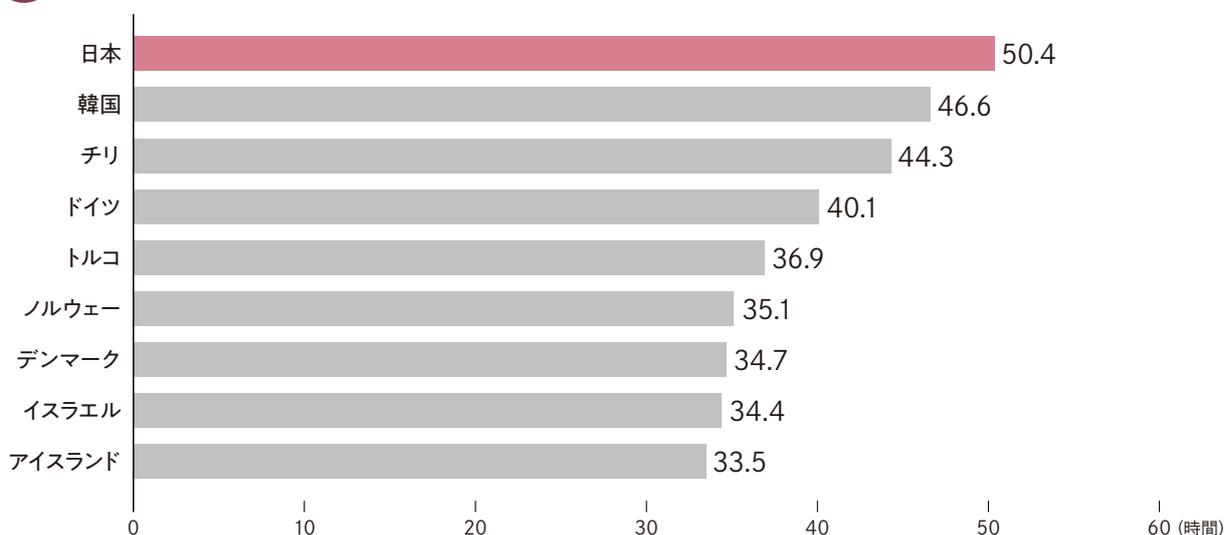
**北野先生** 加えて、通勤時間も長い状況があります。就労時間に関しては大きな構造的な問題があるほか、文化的・歴史的な背景も影響していそうです。乳幼児教育の世界では、子どものために働くことが喜びであり、待遇は二の次といった考え方が根強く残っています。確かに魅力的で社会的な意義が高い仕事ですが、情緒的な面だけではなく、明確な根拠に基づいて処遇を考えていく必要があると思います。保育者の働きやすさを改善して乳幼児に対する教育の質を高めることは、保育者のみならず、子どもの権利を守ることにほかなりません。

**吉田さん** 就労時間の改善という点では、個々の園でできることもあります。例えば、保育者の出勤

から退社までの仕事を5分刻みで記入する「タイムスタディ」を作成すると、「この仕事には明らかに人が足りない」「この時間帯は注意散漫になりやすく事故が起こる可能性がある」など、さまざまな改善点が見えてきます。そのような根拠をもてば、説得力のある改善を図っていけないのではないかと考えています。

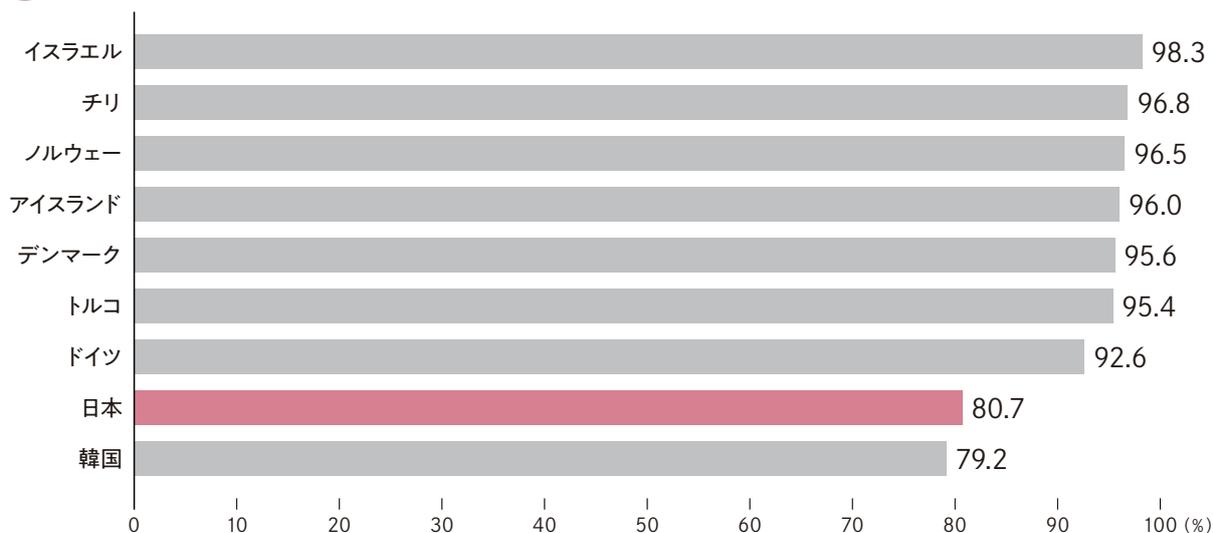
保育者の仕事への満足度を高めたいと考えるときは、離職につながるマイナス要因を減らし、定着につながるプラス要因を増やしていくことが重要になります。マイナス要因は、「給与が低い」「仕事量が多すぎる」「残業が多い」「休みが取りづらい」などです。一方、プラス要因は、「子どもの育ちに貢献していると実感できる」「学びの場が用意されている」「保育者同士が支え合える」「自分の働きが園長や同僚、保護者から認められて評価されている」などです。単純に離職のマイナス要因を減らせば満足度が上がるのではなく、プラスとマイナスの両面から取り組んでいく必要があるでしょう。

### 図 5 常勤の保育者の週あたり仕事時間



出典：国立教育政策研究所「OECD 国際幼児教育・保育従事者調査 2018 報告書 第2巻」より

## 図6 保育の仕事全体として見たときの保育者の満足度



出典：国立教育政策研究所「OECD 国際幼児教育・保育従事者調査 2018 報告書 第2巻」より

### 保育者のみなさんへのメッセージ

## 「貢献」と「魅力」を意識して主体的な姿勢をもち続けてほしい

——最後に、園長先生や保育者の方々へのメッセージをお願いします。

 近年は日本の子どもの貧困率が話題になっています。一般的に「貧困」というと経済的な問題を連想しますが、「関係性の貧困」や「経験の貧困」もあります。たとえ裕福な家庭であっても人間関係が乏しかったり、多様な経験の機会が限られていたりすると、そうした「貧困」に陥ります。その解決には家庭や地域社会を変えていく必要がありますが、園が質の高い幼児教育を提供することで、かなりの程度、サポートできると考えています。

その際、特に園長先生や経営者のみなさんには、「貢献」と「魅力」というキーワードを大切にして、今後のあり方を考えていただきたいと思います。社会にどう貢献しているか、もっと貢献するにはどうすべきかを考え続けることで、保育者への社会的な理解や評価は高まっていくでしょう。また、理念や目標に基づいて自園の魅力を考え、その魅力を高め、子どもの姿を通して魅力を見える化できれば、保育者の定着につながり、さらには保護者や地域社会へ

の発信ともなります。そのように「貢献」と「魅力」というキーワードを意識することで、幼児教育はよりよい方向に変わっていくと考えています。

 アメリカの保育専門組織による「子どもへの約束」という倫理綱領には、子どもを大事にするのと同様に、保育者が自己発揮をして自己実現を図り、自身の可能性を最大限に開花させることの大切さがうたわれています。保育者の処遇や労働環境を改善していくことと併せて、保育の仕事に対する価値ややりがい、社会との関係性をより意識していくべきではないでしょうか。

私はつねづねピンチはチャンスと考えていますが、こども家庭庁の設置を、少子化という課題を抱える教育界全体が変わるチャンスとしない手はありません。0歳から18歳までをサポートすることも家庭庁の方針のもと、園種や職種にかかわらず、みんなで一体となって連携と協働を進めていく気持ちをもちたいものです。そして、子どもたちのために現場から主体的に声を上げ、エビデンスを出し、一緒に制度をつくり上げていきたいと考えています。

「子どもの生活リズムと健康・学習習慣に関する調査2022」より

# 平日・休日の生活リズムのズレを生む「社会的時差ボケ」。 保護者ととともに改善を

近年は、コロナ禍の影響により生活環境が変化しやすい状況が続きました。早稲田大学とベネッセ教育総合研究所が共同で実施した「子どもの生活リズムと健康・学習習慣に関する調査2022」からも、平日と休日の間に生活リズムのズレが生じる「社会的時差ボケ」を始め、幼児期の生活習慣にかかわる課題が見えています。本調査から抜粋したデータをもとに、プロジェクトメンバーである広島大学大学院の田原優先生、愛国学園短期大学の古谷彰子先生に、調査の解説と幼児期の生活習慣を改善するためのアドバイスをいただきました。



広島大学大学院  
医系科学研究科 准教授  
田原 優先生 (たはら・ゆう)

博士(理学)。早稲田大学高等研究所助教、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)医学部助教、早稲田大学理工学術院准教授などを経て、2022年より現職。栄養学の観点から体内時計を研究する「時間栄養学」などの研究を進める。著書に『体を整えるすごい時間割』(大和書房)など。



愛国学園短期大学  
准教授  
古谷彰子先生 (ふるたに・あきこ)

博士(理学)。管理栄養士。早稲田大学ナノ・ライフ創新研究機構招聘研究員、ChronoManage代表など。時間栄養学の観点から医学や栄養学、調理学など幅広い領域の研究を行う。著書に『時間×食事で賢い子が育つ! 簡単・最強子育て』(幻冬舎メディアコンサルティング)など。

## 幼児期の生活習慣は 健康や育ちに影響する

睡眠や食生活といった生活習慣はQOL<sup>\*1</sup>に関連し、子どもの健康や育ちに影響します。園では規則正しく過ごしていても、家庭の生活リズムが不規則な場合もあるため、園と家庭が連携して取り組みたいテーマです。特にコロナ禍の影響を受けた近年は、子どもの生活習慣を見つめ直し、保護者への情報発信や支援に力を入れることが重要になっています。

 「本調査を通して、経験知が確認されただけでなく、新たな課題も見つかって、全体的に生活習慣に関する課題のあり・なしが二極化してい

る印象を受けました。生活習慣については保護者が悩まれているケースも多いため、本調査の結果を保護者にお伝えすることで、家庭の生活習慣を改善する糸口の1つになればうれしいです」

「睡眠」に見られる課題とは？

## 子どもの「社会的時差ボケ」は 肥満や学業成績に影響

近年、生活習慣が乱れる原因として「社会的時差ボケ」が注目されています。私たちは平日、学校や仕事等の社会的な影響で早寝・早起きになりやすい一方、休日は遅寝・遅起きになりやすくなります。

\*1 Quality of life (クオリティ・オブ・ライフ) のこと。人生や生活の質などを指す。

■「子どもの生活リズムと健康・学習習慣に関する調査 2022」の調査概要

調査テーマ：幼児期（3歳児）～小学校低学年の子どもの生活習慣（睡眠・食事・日常的な活動）の実態と、心身の健康・学習面への関連、同居する家族の生活習慣の実態や子どもとのかかわりとの関連を明らかにする。  
 調査対象：全国の3歳児（年少）～小学3年生の子どもをもつ保護者（母親）。515人×性別（男子・女子）×6学年＝6,180人（※ただし、回答者から国外居住の3人を除外）  
 調査方法：インターネットによるアンケート調査

調査時期：2022年7月1日～7月4日  
 調査項目：同居する家族メンバーと対象の子どもの起床時刻・就寝時刻、対象の子どもの食事の種類と頻度・内容、対象の子どもの睡眠や食事に関する習慣、対象の子どもの就園・就学実態や、日中の活動時間など。

<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=5837>



図1 起床時刻

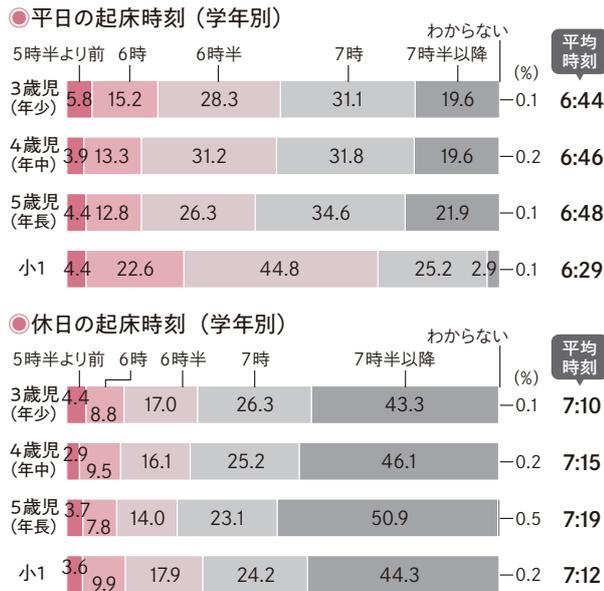
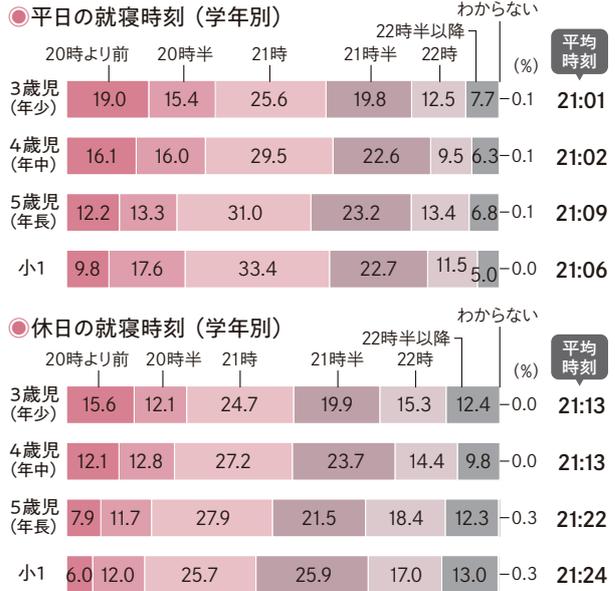


図2 就寝時刻



※図1・図2ともに報告書をもとに、集計を一部改変。

その結果、平日と休日の生活リズムにズレ（社会的時差）が出て、体に不都合が生じやすくなります。こうした現象を「社会的時差ボケ」と呼び、肥満や学業成績とのネガティブな関連が報告されています。

では、子どもたちは平日と休日に、どのような生活をしているのでしょうか。生活リズムの鍵を握る、睡眠の実態を見ていきましょう（図1・図2）。

まず、起床時刻に注目すると、休日が平日よりも明らかに遅く、平均時刻は各学年とも30～40分程度後ろにずれています。就寝時刻は起床時刻ほどではありませんが、休日の平均時刻は平日よりも10分程度遅くなっています。図示はしていませんが、小学2年生、3年生と学年が上がるにつれて、休日の起床・就寝時刻はさらに遅くなる傾向があります。

図3は、睡眠実態をもとに、子ども・父親・母親の「社会的時差ボケ」の状況を、子どもの学年別に表したもので、図4はその計算例を示したものです。

図3 社会的時差ボケ（子ども・母親・父親、学年別）

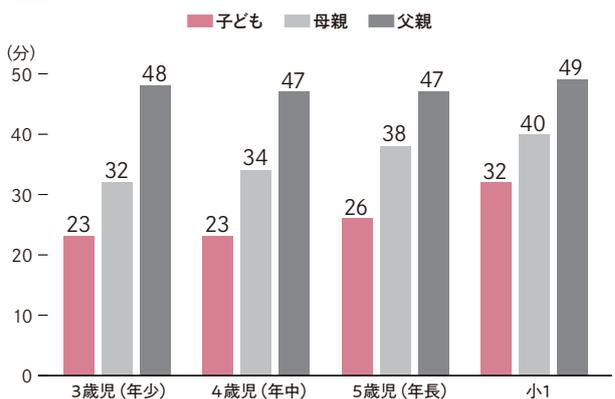
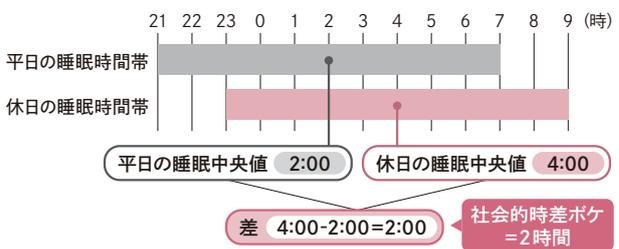


図4 社会的時差ボケの計算例



父親の「社会的時差ボケ」がもっとも大きく、子どもと母親は学年が上がるにつれて増加しています。

「『社会的時差ボケ』は、QOLや健康に大きく影響するといわれています。日の出の時刻が早まる時期に時計の針を1時間進める『サマータイム』に関する研究では、生活リズムの変化により健康被害が生じやすくなるという報告もされています。それに似た状態を毎週のように作り出しているわけですから、意識して改善する必要があるでしょう。幼児期は20分程度なので、あまり気にする必要はないかもしれませんが、生活習慣は保護者からの影響が強いため、保護者の注意を促すような周知をしていく必要がありそうです」

## 必要な睡眠時間を確保して 起床時刻の段差をなくす工夫を

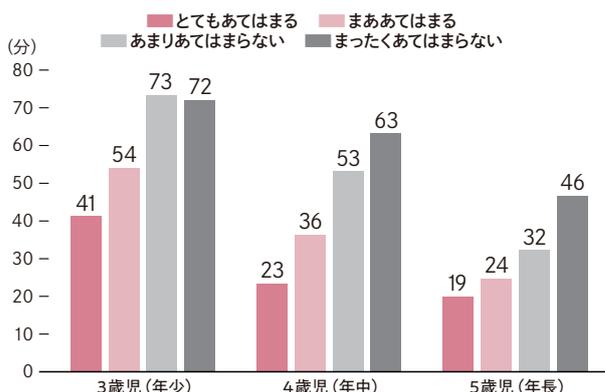
図1 (P.9)の起床時刻を示す図からは、5歳児と小学1年生の間に、平日の起床時刻の段差があることも読み取れます。小学生になり、登校の準備の時間が必要になったり、家を出る時刻が早まったりすることが理由だと考えられます。

「小学校入学時まで、早起きが必要になることに気づかない保護者は、意外と多いかもしれません。『社会的時差ボケ』改善の観点からは、起床時刻の段差は少ない方がよいので、年長のうちから小学校での起床時刻を見据えて、少しずつ早起きに慣れていくことをお勧めしたいです」

早く起きるためには、寝つきをよくすることが重要です。そこで注目したいのが、昼寝の時間と普段の寝つきのよさの関連です。図5を見ると、3～5歳のどの年齢でも、平日の昼寝時間が長いほど、普段の寝つきが悪い（寝つきのよさが「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」）ことがわかります。

「幼児期に必要な睡眠時間は個人差が大きい上に、成長するにつれて変化するため、保護者はできるだけ、自分の子どもに必要な睡眠時間を把握するとよいと思います。朝、無理に起こさずに自然に目覚めさせることを何度か試してみると、その子が必要とするだいたいの睡眠時間がわかりま

図5 平日の昼寝の時間と普段の寝つきのよさ



※「普段、寝つきがよい」かどうかを尋ね、「とてもあてはまる」～「まったくあてはまらない」と回答したそれぞれの群の平日の昼寝の時間の長さを図示。

図6 就寝1時間前以降のスクリーンタイムがある



す。その上で就寝や起床の時刻を考え、足りない時間を昼寝で補うのです。可能であれば園も連携して、一律に昼寝をするのではなく、睡眠時間が不足している子どもだけが昼寝をするような形にできることが理想ですね」

本調査で明らかになった課題には、就寝前のスクリーンタイム<sup>\*2</sup>もあります。就寝1時間前以降にスクリーンタイムのある幼児期の子どもは、約半数に上りました(図6)。

「就寝前のスクリーンタイムが睡眠の質などに悪影響を及ぼすことは、さまざまな研究で指摘されています。画面から出る青色光を浴びることが刺激となり、睡眠が抑制されてしまうのです。調査結果から就寝前のスクリーンタイムが日常化していることがうかがえますし、子どもが機器を使っていなくても、隣で寝かしつけている保護者の機器から青色光を浴びてしまう場合もあります。少しのことで子どもの睡眠の質を改善できるので、保護者にしっかりと考えていただきたい課題です」

「『社会的時差ボケ』の解消には、平日から良質な睡眠を十分にとって疲れをためないようにし、休日に自然と早起きできる習慣を整えることが大切です」

\*2 スマートフォン・携帯電話、パソコン、タブレット端末、テレビ、ゲーム機などの画面を見る時間。

## 睡眠とも深くかかわる「食生活」の課題は？

### 我慢を強いるのではなく 時間帯を変えるなどの工夫で改善を

本調査では、食生活と睡眠の深い関連も見えてきました。「朝食を一人で食べる」子どもの平日の起床時刻が、その1つです。「朝食を一人で食べる」子どもは、「誰かと一緒に朝食を食べる」子どもに比べて、どの年齢でも起床時刻が遅い傾向が見られました（図7）。だからといって、「誰かと一緒に朝食を食べる」子どもの睡眠時間が短いわけではないことも明らかになっています。そうした結果から、家族などと一緒に朝食を食べると、早寝・早起きの習慣づくりにつながりやすいことが示唆されます。

**田原先生** 「朝の時間はただでさえ慌ただしいので、家族がそれぞれ食事を済ませるケースがあるのかもしれませんが、しかし、家族で一緒に朝食を食べる習慣があると、子どもは決められた時刻にしっかりと起きようという気持ちになり、早起きにつながりやすくなると思います。さらには、小学校入学時の起床時刻の段差も減らせる可能性があります」

一方、夜型傾向の子どもは、夜食をとる頻度が高いことも明らかになっています（図8）。図示はしていませんが、夜食の内容に着目すると、朝型傾向の子どもに比べて、アイスクリームやジュース、菓子類をとる比率が高いこともわかりました。

**古谷先生** 「夕食後に糖質を多く摂取することで、血糖値が上がって良質な睡眠を妨げてしまいま

図7 朝食を一人で食べる×平日の起床時刻

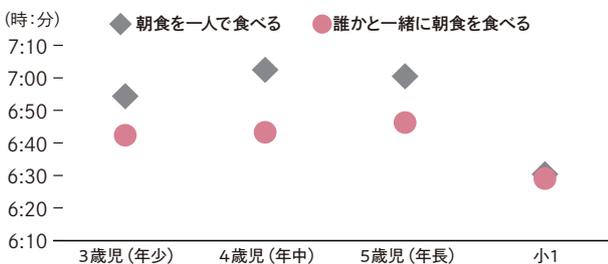
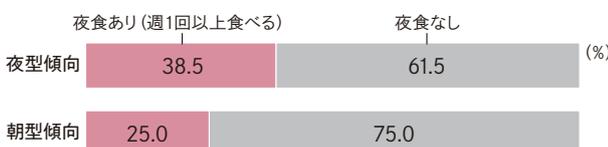


図8 夜食の有無(幼児)



す。夜は血糖値が上がりやすい時間帯なので、よく眠れずに夜型生活になりやすくなるのです。講演会で『ジュースやアイスクリームの飲食は夕食後ではなく、体内がエネルギー不足になっている起床後に変えた方がよい』という話をすると驚く保護者が多いため、ぜひ園の先生方からも周知をしていただきたいと思います。我慢を強いるわけではなく、時間帯を変えるだけで問題の解決につながるのです。また、就寝前の運動も、気持ちが興奮して覚醒してしまうため、避けた方がよいでしょう」

### 子どもの健康やQOLを守るため 保護者と目線を合わせた対応を

食習慣に関する調査では、朝型傾向と夜型傾向の子どもでは、普段食べている食品にも違いがあることがわかりました。例えば、朝型傾向の子どもは野菜類や果物類、豆腐、乳製品（牛乳・ヨーグルト・チーズ）など、一方、夜型傾向の子どもは菓子類や砂糖入り飲料などを多くとる傾向がありました。そうした違いは、早寝・早起きなどの生活習慣と、健康的な食生活が深く関連していることを表しています。

**古谷先生** 「幼児期は、3食では栄養を十分に賅えない場合がありますため、おやつも補食として意味があります。また、昼食後におやつを食べると、夕食時の血糖値の上昇が緩やかになるといった利点もあります。栄養士・調理士の方々は非常に工夫をされて手作りお菓子を出されることが多いと思いますが、糖質を余分に付加しないことを考えると、バナナやミカン、芋といった果物や野菜をそのまま出してもよいと思いますし、パンやおにぎりも十分なおやつになることをお伝えしたいです」

以上のように本調査からは、睡眠や食生活といった生活習慣の改善に向けて、保護者とともに考えるきっかけとなる、多くのエビデンスが得られました。

**田原先生** 「一般に生活習慣にかかわるデータは、小学校以降の学業成績などに影響を与えるといった話題で取り上げられることが多いと思います。もちろん、それらも大切ですが、幼児期の子どもの健康やQOLに深くかかわることにも着目して、保護者の方々に情報をお伝えいただけたらと思います」

# 子どもの具体的な姿を通して 「非認知(社会情動的)能力」 を可視化し保育の質の向上につなげる

## 一般社団法人 大阪府私立幼稚園連盟教育研究所

子どもの成長に大きくかかわるとされる「非認知(社会情動的)能力」(以下、非認知能力※)ですが、「そもそも非認知能力って何?」「自園の子どもにも育っているの?」という声もよく聞かれます。一般社団法人大阪府私立幼稚園連盟教育研究所では、そうした疑問を出発点として、保育者同士が対話を通して非認知能力についての理解を深め、保育の質を高めていく研究を、6年間にわたって実施しました(図1)。子どもの具体的な姿から非認知能力の高まりを捉える実証研究と、実際に非認知能力が育まれた様子をエビデンスで確認する理論的研究の側面をもつ研究について、3人の先生にお話をうかがいました。



一般社団法人  
大阪府私立幼稚園連盟  
教育研究所 所長  
幼稚園型認定こども園  
高槻双葉幼稚園 教頭  
岡部祐輝先生



一般社団法人  
大阪府私立幼稚園連盟  
教育研究所 副所長  
幼保連携型認定こども園  
せんりひじり幼稚園・  
ひじりにじいる保育園 副園長  
安達かえで先生



一般社団法人  
大阪府私立幼稚園連盟  
教育研究所 副所長  
幼保連携型認定こども園  
光の園幼稚園 園長  
小池聖子先生

### 研究概要

研究主体：一般社団法人大阪府私立幼稚園連盟教育研究所

研究名：第26次研究プロジェクト  
「0歳児から6歳児までの保育・教育を考える～非認知能力はどのようにして育まれるのか～」

期間：2016年4月～2022年3月

研究内容：園における実証研究を行い、実証研究の効果測定を理論的研究で実施

【実証研究】子どもの姿をもとに非認知能力を捉える

【理論的研究】子どもに育まれた非認知能力を、他調査との比較等を用いて表す

## 非認知能力をどう捉え、いかに育ちを支えるか

### 研究の背景・ねらい

#### 見えにくい力の育ちを可視化

内面的な力であるため、数値化が難しい非認知能力を研究題材とした理由について、一般社団法人大阪府私立幼稚園連盟教育研究所(以下、研究所)の所長を務める岡部祐輝先生は、次のように語ります。

「新しい要領・指針\*1などでも示されているよう

に、遊びを中心とした保育の重要性についての理解が進む一方で、そこで育まれる力についての理解は十分とはいえない現状があります。そのため、研究所では非認知能力に着目し、遊びや生活を通して見えにくい力がしっかりと育っていることを明らかにしたいと考えました」

研究開始の前年となる2015年には、子ども・子育て支援新制度が始まり、研究半ばの2019年には、幼

\*1 要領・指針とは、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を指す。



ました。自分の保育が子どもの育ちにつながっていることが実感でき、自信がもてるとともに、保育をますます楽しめるようになりました」(安達先生)

複数の目による見取りは、独り善がりを防ぐという面でも意味があると、岡部先生は話します。

「子どもの姿を1人で見ると、3人で見て話をした方がよりさまざまな解釈ができます。非認知能力は見えにくい力であるため、できる限り客観性を担保することが大切だと考えています」

日常の保育も、次第が変わっていきました。光の園幼稚園では、子どもに任せる部分を増やすという方針を大切にするようになりました。

「保育者が主導していると、子どもは自分のキャパシティを超えて成長していかないことに気づきました。そこで、できるだけ子どもに投げかけてみて私たちはサポートに回るようにすると、子どもの発想の伸びしろが増え、保育も切れ切れにならずに広がっていくようになりました」(小池先生)

例えば、4月に穴掘りをしたときに出てきたかけらをきっかけに、「鉱石ではないか」「恐竜ではないか」などと、子どもたちが自分の興味とつなげて考え、行動。11月の作品展では自分たちが作った鉱石や恐竜の骨組みを飾るなど、継続的で発展的な活動が展開されたといいます。

せんりひじり幼稚園では、毎月、各年齢担当の保育者が集まってカリキュラム会議を行っています。

以前は活動内容の報告や共有が中心でしたが、研究が深まるにつれて、「今月はこんな成長が見られたから、来月はこういう活動を取り入れたい」「子どもの関係性が深まったから、卒園に向けて何ができるかな」など、子どもの育ちをベースとした話し合いが自然と生まれるようになりました。

「子どもの姿の中には、育ちにつながる宝物が数多くあることに気づいたのだと思います。普段の保育の中での保育者のかかわり方や言葉かけが、非認知能力を伸ばすチャンスになるという意識をもって、保育に取り組むようになりました」(安達先生)

### ● 0～2歳児の非認知能力

研究では、0～2歳児の非認知能力の育ちに着目したことも大きな特徴です。一例を挙げると、0歳児クラスでは、砂場遊びを通して砂の感触を楽しんだり、砂が形になる不思議さを発見したりする姿から「好奇心」「探究心」の芽生えを見取りました。また、楽しい気持ちを保育者と共有し、にっこり笑う姿から「愛着関係」の芽生えを見取りました。

「乳児の非認知能力の見取りは難しく、見落としやすいのですが、ちょっとした目線の動きや手の力の入れ具合など、言葉にはならない表現を通して育ちが見えることに、改めて気づきました。今回の研究では、乳児期から幼児期にかけての非認知能力の発達の系統性までは対象としませんでした。乳児の育ちに関する理解は大変深まりました」(安達先生)

## 非認知能力の確かな育ちをさまざまな視点から把握

### 実証研究の取り組み③

#### 保護者や若手保育者への発信方法の開発

子どもの育ちを保護者と共有するために、情報発信の工夫に関する研究にも取り組みました。

「保護者と保育者が子どもの育ちへの思いや方針を共有できると子どもは安心して伸びていきます。逆に、そこにずれが生じると子どもが育つ機会を逃してしまう場合もあるため、保護者への継続した情報発信は、非常に大切だと考えています」(安達先生)

せんりひじり幼稚園では、子どもの育ちを伝えるためにポートフォリオやドキュメンテーションを作成しているほか、園のブログやSNSなど、さまざまなメディアを活用しています。最近では「非認知能力」という言葉を交えて子どもの育ちを説明する機会も増えていきます。

「保護者の間にも『非認知能力』という言葉が浸透してきたため、園の通信で非認知能力やそのキーワードを説明し、園がめざす保育や子どもの姿をわかりやすく伝える工夫をしています」(安達先生)

光の園幼稚園では、週に2、3回、保護者に対して子どもの姿を写真と文章で伝えていましたが、その内容が質的に大きく変化しました。

「以前は、『こんな遊びを楽しんでいます』といった事実が中心でしたが、遊びや活動を通してどのような育ちが見られたかなどを、『非認知能力』という言葉より、もう少しわかりやすい言葉で表現できるようになりました。共有したい子どもの姿が保護者に少しずつ伝わるようになり、若手保育者も含めて保育で大切にしていることへの理解が進み始めています」(小池先生)

研究所では、情報発信にかかわる研究の一環として、非認知能力について地域や社会に発信することを目的としたリーフレット\*<sup>3</sup>も作成しています。

### 理論的研究の取り組み

#### アンケート調査により実践の効果を検証

研究では、卒園生への2回のアンケート調査により、非認知能力の育ちの可視化も試みました。

アンケート調査の結果を見ると、子どもの非認知能力の獲得を表す行動を尋ねた質問での「本調査」の結果は、多くの項目で8割以上の肯定率を示しています(図3)。また、同一質問をした「Z市調査」

との比較では、多くの項目で数値が上回りました。さらに、同一ではないものの類似の質問をしているベネッセの「幼児期から小学生の家庭教育調査・縦断調査」の7項目との比較でも、良好な結果が得られました。

「他調査との比較では、本研究の参加園の卒園児は、特に自尊心やがんばる力、勤勉性などが非常に高いことがわかりました。質問の表現が異なる調査との比較もありますが、非認知能力として乳幼児期に育みたい力が、しっかりと育っていることが感じられました」(岡部先生)

研究の成果をもとに、各園では現在も非認知能力の育ちを支える実践を続けています。今後さらに取り組みを深める上で、もっとも気をつけていることの1つが「形骸化」を防ぐことです。

「子どもの姿から非認知能力の育ちを解釈することに慣れてくると、友だちを手助けしていたら『思いやりの気持ち』など、条件反射的にあてはめるだけになりがちです。しかし、保育者同士で対話をしながらより深く見ていくと、子ども同士の人間関係の深まりなど、別の育ちがあることに気づくかもしれません。そのように、常に対話をする中で子どもの多様な育ちを見取り、支えることを、これからも大切にしていきたいと思います」(安達先生)

図3 卒園児の非認知能力等の調査と他調査との比較

項目番号	質問の内容	キーワード	本調査	Z市調査	ベネッセ調査
1	自分のことが好きですか	自尊心	94.0	80.4	—
2	失敗してもまたがんばろうと思えますか	がんばる力	97.2	82.6	96.3
3	はじめてのことに挑戦しようと思えますか	外向性・好奇心	95.1	91.4	93.4
4	自分のことをやさしいと思えますか	協調性	86.8	75.3	—
5	よくほめられますか	自尊心	81.6	81.4	—
6	誰とでも仲良くできますか	協調性	89.2	80.7	92.2
7	クラスの役割をしっかりとはたしていますか	勤勉性	93.6	77.4	—
8	自分ががんばり屋さんだと思いますか	がんばる力	90.3	90.2	74.1
9	どうしたらいいか不安になるときがありますか	神経性傾向	75.3	67.7	—
10	友達と考えが違ったときに相手の話を聞くことができますか	協調性	93.0	86.6	83.8
15	自分の考えをみんなの前で話すことができますか	自己主張	74.5	90.6	86.9
16	新しいことや変わったことが好きですか	開放性	91.0	82.3	—
18	ふしぎだな、どうしてだろう、などと考えることがありますか	探究心	89.3	86.1	—
21	友達と協力することができますか	協調性	97.8	87.5	95.8
24	しょうらいの夢や目標がありますか	自尊心	93.2	83.4	—
25	自分はおとなしいと思えますか	外向性	41.3	61.5	—

※数値は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計(%)。 ※全部で25の質問項目のうち、他調査と比較している項目のみを抜粋。 ※各項目の最高値を強調。  
 ※本調査は、2018年3月の第1回卒園生アンケート(449人)と、2021年3月の第2回卒園生アンケート(188人)を合計した637人を分析対象としている。  
 ※Z市調査は、2018～20年に小学1年生(9,958人)を対象に行った調査。  
 ※ベネッセ調査は、2015年3月に小学1年生(544人)を対象に行った「幼児期から小学生の家庭教育調査・縦断調査」。  
 \*「第26次研究プロジェクト研究紀要」(一般社団法人大阪府私立幼稚園連盟教育研究所)をもとに編集部で作成。

\*3 0～5歳児の育ちに関するリーフレットは、右記のURLをご参照のこと。[http://www.kinder-osaka.or.jp/document\\_list.html](http://www.kinder-osaka.or.jp/document_list.html)  
 もしくは、一般社団法人大阪府私立幼稚園連盟の公式サイトより、「教育研究・研究所・経営研究関連資料」→「こどもとこ 第26次プロジェクトチーム著」をご参照のこと。

# 数字では見えない 「育ち」を支える保育実践

どこまでも保育や子どもを探究して地域の親子の笑顔を追いかけて続ける

「スーパー保育者をめざす」と公言して地域の親子に寄り添い続ける保育者がいます。沖縄女子短期大学で助教を務めるとともに、フリーの保育者として活動する「バムちゃん」こと、羽地知香先生。とことんまで子ども目線にこだわるその保育のスタイルは、数々の経験で得た出会いと学びが紡がれて、生み出されたものでした。



## 沖縄女子短期大学助教 羽地知香先生 (はねじ・ちか)

静岡県生まれ。「バムちゃん」というニックネームは、絵本『ロッタちゃん』シリーズに登場する豚のぬいぐるみ「バムセ」が由来。静岡県内で幼稚園教諭として勤務した後、結婚を機に沖縄県に移住。非常勤保育士を経て健診事後教室などで障がい児保育に深くかかわる。2017年より「木漏れ日喫茶」の活動をスタート。沖縄女子短期大学では非常勤講師を経て、2019年度に児童教育学科助教に就任。

## 小さな畑の木漏れ日の下で、思い思いの遊びを繰り広げる

### 子どもに関する専門家が集まって 自由な遊び場をプロデュース

沖縄県那覇市首里の静かな住宅街にある小さな畑で、月1回ほど開催される「木漏れ日喫茶」。地域の親子が集まって、季節に応じた活動や遊びを楽しむイベントが行われています。グアバやコーヒー、パッションフルーツといった果樹が植えられた畑には、切り株や水たまりがあったり、カエルや虫たちが顔を出したりと、子どもたちの好奇心や探究心をくすぐる豊かな環境が広がります。木漏れ日喫茶のイベントには、毎回テーマが設けられていますが、その横で子どもが思い思いに遊び始める様子もよく見られます。スタッフや保護者は、そんな子どもたちの思いを尊重して、それぞれに遊びを展開していく姿をほほえみながら見守ります。

そうした自由な空間を羽地知香先生（以下、バムちゃん）とともに作り出しているのは、畑を

所有する玉城真さん、純さん夫妻です。子育て支援の場として地域の親子に開放したいと考えたとき、当時フリーの保育者として活動していたバムちゃんを知って、声をかけました。

「育児に悩む保護者も多い中で、『ここでは大人も子どもも好きなように過ごしていい』と感じられる場をつくらうと思い立ちました。型にとらわれず、とことん子どもの目線から考えるバムちゃんの保育は、そんな方針にぴったりだと思ったん



▲木漏れ日喫茶チームのみなさん。右から玉城真さん、玉城純さん、山本雅子さん。



◀どのような場面でも大人は手や口を出さず、子どもがやりたいように作業をする様子を見守ります。だからこそ、完成したムーチャーがっすうおいしく感じられるのでしよう。

です」(純さん)

オファーを快諾したバムちゃんを中心に、美術の講師である真さん、保健師の純さん、臨床心理士の山本雅子さんなどの専門家がチームとなり、木漏れ日喫茶の活動を2017年にスタートさせました。その評判は瞬く間に広がり、今ではSNSで告知をすると、30分と経たずに定員に達し、中には遠方から参加する親子もいるほどの人気となっています。

### 「家族に食べてもらいたい」 子どもの思いから遊びは始まる

2023年2月の木漏れ日喫茶のテーマは、「ムーチャー作り」でした。ムーチャーとは、「もち」を表す沖縄言葉で、もち粉に黒糖や紫芋、水などを加えて、手でこねて作るお菓子です。沖縄ではもっとも寒い旧暦12月8日に家庭で作られ、神仏に供える風習があります。このように木漏れ日喫茶では、毎月、季節感を味わえるテーマを設定しています。

「沖縄は1年を通して温暖で、季節の移ろいを感じづらいので、この場では四季それぞれのよさを感じられる遊びを、子どもたちに楽しんでもらいたいと思っています」(バムちゃん)

この日の参加者は5家族13人。バムちゃんが奏

でるウクレレのオリジナルソングによって開始が告げられ、ムーチャー作りが始まりました。ガラス製の大きなボウルにたっぷりに入ったもち粉を、家族ごとに小さなボウルに取り分けていきます。もちろん、作業の主役は子どもたち。小さな手で大きなスプーンをぎこちなく使い、「これはお母さんの分、これはお父さんの分、これはお姉ちゃんのお分……」と家族の人数分のもち粉を取り分けてから、隣の子どもの大きなボウルを渡します。途中でもち粉をこぼしたり、ボウルを落としそうになったりする場面もありましたが、大人は手や口を出しません。

「こぼしても後から拭けばいいだけですし、もち粉が入ったボウルを落としても……、まあ、何とかなるんですよね。それよりも、子どもたちの『家族に食べてもらいたい』『自分でやってみたい』といった気持ちを尊重したいんです。今日も慣れない手つきで必死に取り分ける姿を見て、やっぱり遊びとは子どもの思いから始まるんだと、改めて感じました」(バムちゃん)

### 子どもを信じて任せる気持ちが 保護者にも浸透

木漏れ日喫茶に以前も参加したことのある保護



◀「自由にやっごらん」と、子どもに任せるバムちゃんの様子を見て、周りの保護者も子どもの姿をおおらかに見守ったり、一緒に楽しんだりしていました。

者に話を聞くと、「ここでは普段よりも子どもに対しておおらかな気持ちになれる」といいます。

「いつもの自分なら『こぼさないでね』と、つい口を出すと思います。ところが、スタッフやほかの保護者の方がのんびりと見守るの様子を見てみると、なんだか安心して、その後の子育てでも肩の力を抜くことができました」

別の保護者のご自身が保育者であり、保育の参考にもしたいという思いで参加したそうです。

「保育中は、安全面を考えて口を出すことも多いのですが、『こう動いてほしい』といった保育者の思いを押しつけている部分もあったと、バムちゃんの保育を見て気づかされました。子どもを信じて任せると、多少の失敗はあっても逆にこちらが考えている以上の広がりを見せることもあり、驚かされます」

ムーチーをこねた後は、畑に生えている月桃\*の葉や茎をみんなで取りに行き、洗った葉でムーチーを包みました。月桃の茎は金づちでたたいて繊維を取り出し、葉を縛るひもとして使います。

茎を加工していた男の子が、「いい匂いがする」とつぶやくと、バムちゃんはすかさず近寄り、「すごい、本当だ！ほかの人にも教えていい？」と、その発見と一緒に喜びました。男の子が誇らしげな表情でうなずくと、バムちゃんはみんなに声を

かけて月桃の放つ香りを楽しみました。

## 豊かな遊びが保障された空間で 子ども同士の交流も活発化

畑で大きな鍋に湯を沸かしてムーチーを蒸し始めると、いよいよ自由な遊び時間の始まりです。畑の隣にはさまざまな遊具が設置された施設がありますが、子どもたちは豊かな自然に興味を示し、夢中になって遊びをつくり出していきました。

「泥でお団子を作ろう」「この穴に水をためたい」「葉っぱで作った舟を浮かべよう」「見たことのない花がある」等々、ちょっとした思いつきや発見から1人で始めた遊びに、ほかの子どもも加わって、グループができていきます。その中で協力をしたり、きちんと順番を守ったり、年上の子が年下の子に教えたりといった姿が、あちこちで見られました。あらかじめ遊び方が決まっておらず、自由に試行錯誤できる環境だからこそ、「どうすればもっと面白くなるか」といった発想力や探究心が発揮されて、遊びがどんどん発展していく様子が伝わってきます。

木漏れ日喫茶が自由な空間になるまでには、さまざまな試行錯誤がありました。例えば、「今日は布遊びをしよう」とテーマを決めて、バムちゃん

\*熱帯から亜熱帯に分布するショウガ科の植物。沖縄県ではハーブの一種として活用されている。



◀年齢の異なる子どもたちが、相談をしたり、工夫をしたり、教え合ったりして、遊びをどんどん面白くしていく様子が見られました。

▼子どもから教えられて月桃の茎の香りを楽しむバムちゃん。子どもの気づきや発見を敏感に察して一緒に喜んだり、驚いたりする様子が見られました。



が先頭に立ち、みんなに働きかけたこともありました。しかし、興味を示す子がいる一方で、いくら呼んでも来ない子もいて、そうした姿を見るときに、無理に誘い込むことの意味のなさにバムちゃんは気づいたといいます。

『〇〇をするからみんな集まって』とか『もう終わらしましょう』と大人が主導するのは、この場所にはそぐわないと感じました。そこで、『～ねばならない』を求めるのをやめて、もっと柔軟に保育を考えていくことにしたんです」

木漏れ日喫茶のイベントには50人近くの子どもが集まることもあります、そんなときでもけん

かや物の取り合いが起こることはありません。

「ここは自然豊かで、興味をもてるものがたくさんあることも一因なのでしょう。その遊びにこだわらなくても、別の遊びができる空間の保障があるので、例えば順番待ちのときもゆったりとした気持ちで過ごすことができます。ブランコに乗る順番を木に登って待つ子もいたりして、待つことを楽しんでいる様子がうかがえます」(バムちゃん)

その後、みんなで完成したムーチーを食べて、この日の活動はいったん終了。終了後も畑は開放されており、泥だらけになって遊び続ける子どもたちの歓声が、いつまでも響きわたりました。

## 理論と実践を兼ね備える、「スーパー保育者」をめざす日々

### 子どもの発達を学び始めたら 保育が楽しくなった

バムちゃんは、故郷の静岡県で幼稚園教諭としてのキャリアをスタートさせました。いくつかの園を経験する中で、自身の子どもや保育に対する思いと園の方針とのギャップに、葛藤を感じたこともありました。

「園の方針に私自身が追いつかず、子どもにさせることも多い状況で、もっと自由に楽しんでほしいという思いとの板挟みに苦しみました。私も若かったので子どもの前で泣いてしまったら、みんなが『先生のせいじゃないよ』と言ってくれて、自分の気持ちがちゃんと子どもに伝わっていたと気づくことができました」(バムちゃん)

どのような環境であっても、子どもたちが「先



◀子どもたちの遊びは次第に大胆になって、水たまりにつかったり、サンダルや靴を泥に沈めたりする姿も。保護者もそんな子どもと一緒に楽しんでいました。

▶バムちゃんが「絵本と一緒に読みたい人はおいで」と声をかけると、何人かが興味を示し、読み聞かせが始まりました。



生と遊んで楽しかった」「また遊びたい」「次は何するの？」などと喜んだり、期待してくれたりする姿を受け、どうすれば子どもの笑顔や喜ぶ姿を見ることができるかを考え続けました。

そんなバムちゃんの転機となったのは、結婚で沖縄県に移住し、園で働き始めたことでした。

「子どもたちは、急に雨が降り出すとスーパーに立ち寄って、段ボールをもらって傘代わりにするんです。たくましくて、驚きますよね。そんな姿を見て、『子どもの発達の方ってすごい。でも私はまだ発達について十分に理解していない』と気づいたんです」(バムちゃん)

その後、バムちゃんは子どもの発達に関する県内外のさまざまな研修や学会に参加するようになりました。こうして子どもへの理解が深まると、保育ががぜん楽しくなったといいます。

「それまでは理想の保育を求めて環境を構成し、そこに子どもがうまくはまらないと、身を削られるような疲れを感じていました。そうではなく、『この子はなぜ怒っているのか』『次の成長には何が必要か』など、一人ひとりの発達を出発点として、子どもの言葉に耳を傾けながら環境や接し方を考えていくと、子どもが自分から動いてくれるようになることに気づいたんです。すると、不思議と仕事後の疲れが、とても心地よいものになって

いきました」(バムちゃん)

そうした保育の姿勢は、木漏れ日喫茶での子どもへの接し方にも表れています。

準備をしすぎず、自分の気持ちをぐっと引いて、子どもの姿に合わせながら一緒に遊びをつくっていく。子どもの興味がこちらの意図とは別の方向に向かったとしても、その寄り道が子どもにとって大切なステップなのだと認めて寄り添う。子どもの姿の「予測」と保育者の「願い」をもち、子どもが育つタイミングを見逃さないようにしながら、引き算の保育を心がけています。

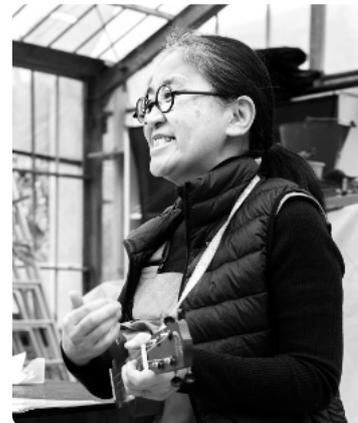
## ソーシャルワークを学び 保護者支援の協働体をつくる

子どもの発達を出発点とした保育は、特別な支援を要する子どもに対しても非常に重要です。バムちゃんは、7年間ほど市の健診事後教室で発達障がいなどの可能性のある子どもやその保護者の支援に携わったほか、自閉症と診断されたご自身のお子さんと向き合ってきた経験などを生かして、現在、勤務する沖縄女子短期大学では主に障がい児支援について教えています。

「子どもは『この子は障がいがあるから』といった先入観をもちません。『どうすれば一緒に楽しめ



◀ムーチーが蒸し上がり、あたりに月桃の独特の芳香が漂うと、子どもたちは大喜びで駆け寄ってきました。



るか』という純粋な気持ちから、必要に応じて助け合っています。大人も『何ができる・できない』といった視点で子どもを捉えるのではなく、その子自身が何を求めているかを全力で感じ取ることから、支援は始まると思います」(バムちゃん)

バムちゃんは、子育てに悩む保護者への支援の重要性も痛感して、40歳を過ぎてから通信制の大学でソーシャルワーク(社会福祉援助、相談援助)について学び始めました。

「保護者の話を親身になって聞き、寄り添いすぎるあまりに共倒れになる同僚を数多く見てきました。ソーシャルワークのスキルは、保護者との間に適切な距離を保ちながら、保育者ができる支援を考えることに役立ちます。保護者を助け、保育者自身を守るスキルだといえます」(バムちゃん)

保護者の抱える問題が保育者の支援の範ちゅうを超える場合は、他の専門職につないで協働することを心がけています。それが、木漏れ日喫茶が多様な専門職のスタッフでチームを構成している理由です。

## 子どもを笑顔にする保育を 地域に広げていきたい

バムちゃんは、「スーパー保育者になりたい」と、

よく口にします。そのめざすところを聞いてみると……。

「実は、はっきりした定義はなくて(笑)。子どもと一緒に思い切り遊べて、しっかりと発達について語れる保育者というイメージです」

そうした思いが、保育者になった後も実践を重ねるだけではなく、発達やソーシャルワークなどの理論を学び続ける原点にあるのでしょうか。

バムちゃんは、今後の展望をどのように考えているのでしょうか。

「私たちがかかわれるのは、子どもの人生の中では針の先っぽのような短い時間です。でも、そんな一瞬の出会いが、子どもの人生を豊かにするきっかけになるかもしれません。そうした素敵な時間をもらっていることを大切にして、私は子どもと接し、学生にもそのすばらしさや意義を伝えています。そして、それぞれの場所で展開される『子どもを笑顔にする保育』が次第に地域へと波及し、いずれ社会全体につながっていくといいなと思っています」

木漏れ日喫茶でも対象を広げ、医療ケアが必要な子どもや妊婦さん、これから家族になろうとしている人などに向けたイベントも、催したいと考えています。スーパー保育者をめざすバムちゃんの活動は、これからも続きます。

## 刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。



## 「これからの幼児教育」バックナンバー

2022 (冬) | 特集 | 「しくみ」で積み上げ、質を高める幼保小接続

2022 (春) | 特集 | 園長を軸に考える若手保育者の採用と定着

2021 (秋) | 特集 | すこやかな育ちを守る危機管理の考え方

※最新号、バックナンバー等の追加発送は行っていません。

◎WEBサイトから、すべての記事を無料で閲覧・ダウンロードいただけます。

ベネッセ

<https://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/>

「これからの幼児教育」お問い合わせ窓口

〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17 TEL.0120-926-610 (通話料無料) 受付時間/9:00~18:00 (土日・祝日・年末年始除く)

※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、TEL.086-214-6301へおかけください(ただし通話料がかかります)。